

## 『生いたちの記』

「いま生きている人で、世界でいちばん偉い人はだれだろうか？」と尋ねられると、たいてい  
の人は、くちぐちに「アルベルト・シュヴァイツァーだ」と答えるだろう――

『人間はみな兄弟』（青少年のためのシャヴァイツァー伝）の著者、チャリー・メイ・サイモン女史は、この本の冒頭にこうして書いています。『人間はみな兄弟』の出版は千九百五十六年ですから、今から九年前ということになります。ここにみえる評価は、さる九月五日の早朝、当のシュヴァイツァー博士が永遠の眠りにつくまで、変わるところがありませんでした。それだけにその死の報は、世界の人々を悲しみの淵におとし入れました。その反響は、たちまちにして新聞や雑誌に、善意に満ちたさまざまな追憶文となってあらわれました。そのうちに、博士に関する本が、方々の書店から矢つぎばやに刊行され、あるいはすでに刊行されていたものが改めて取りあげられ、それらの広告が新聞の紙面を毎日のようににぎわすようになりました。まるで堰を切

ったような、という比喻がそのままではまりそうにさえ思われました。

こうした現象を、れいのう、たかたのごとく浮かんでは消える一時的な流行と同一視することはできないとしても、非情なジャーナリズムに乗せられた以上、なにがしかの流行的性格をおびるのはまぬがれますまい。それにもかかわらず、偉大なものはどこまでも偉大なのであります。心ある人々は、そういう流行にはかかわりなく、シュヴァイツァー博士に、今こそほんとうの人間の生き方を学ぼうとしているにちがいありません。

さて、ここに「おすすめしたい本」として取り出しましたのは、博士の自著『生いたちの記』であります。この本をおすすめする理由は、さいわいに、この本の訳者國松孝二氏が、白水社版『シュヴァイツァー選集1』の解説のなかで代弁していてくれます。今それをつぎに引用します。文中『むかしのコルマルの思い出』とありますのは、いわば『生いたちの記』の補遺にあたるもので、ともに右の『選集1』に収められています。

『生いたちの記』と『むかしのコルマルの思い出』とにおいてシュヴァイツァーの語っているのは、かれがギュムナージウムを卒業するまでの時期、いわばかれの人間存在の基底をなしている時期であって、わたしたちはそこに、二十世紀最大のヒューマニストの深層部にふれることができるだろう。そして、自己を見る倫理的眼のきびしさに、はげしく心を打たれるだろ

う。そのきびしさは、人間に対する愛情と信頼の深さに裏打ちされているだけに、おそらくは真によき行為への意志と勇氣とをわきたたせてくれる、数少ない書物の一つだろう。

国松氏の右の解説に尽きているのですが、その裏付けの意味で、内容の一部、すなわち、博士自身が「これにくらべれば、他のいっさいの体験は影が薄い。」とまでいつている、その幼少年時代を通じての大きな体験をした部分を抄出することにします。

「わたしは、はっきりもの心がついて以来世の中に多くの不幸を見てなやみつつけてきた。……とりわけわたしがなやんだのは、かわいそうな動物たちが多くの苦痛と困窮とにたえしのばなければならぬことだった。」として、まだ学校にあがらないころの思い出を語ります。

夕べの祈りのときに、人間のためにばかりお祈りさせられるのが、どうにも合点がいかなくなつた。そこでわたしは、母がわたしといっしょにお祈りをして、わたしにお休みのキスをしてから、こっそり、もう一つ、いっさいの動物たちのために、自分でつくつたつたしのお祈りをした。それはこういうお祈りだった。「愛する神よ！すべての息あるものを守りめぐみたまえ。かれらをすべての悪よりふせぎ、安らかに眠らせてたまえ。」

また、七つか八つのころに、こんなことがあったといひます。

ハイリッヒ・ブレッシュとわたしが、小石を投げるパチンコをゴムひもでこしらえたことがあった。それは春の受難節のころで、ある日曜日の朝、ブレッシュがわたしに、「ねえ、これからブドウ山へ鳥打ちに行こうよ」と言い出した。この申し出にわたしはぎょっとしたが、相手に笑われやしないかということが心配で、反対する勇気が出なかった。そこでかれといっしょに、まだ葉の出していない一本の木のそばへ忍びよった。木の上では小鳥たちが、わたしたちのことを恐れるようすもなく、朝の大気のなかへ、かわいらしくさえずっていた。わたしの相棒は、インディアンが獲物をねらうときのように身をかがめながら、パチンコの皮に小石を一つはさんで、引きしぼった。命令するようなかれの目つきにけおされて、わたしははげしく良心に責めさいなまれながらも、かれにならった。が、心では、的をはずそうと、かたく誓った。その瞬間、日ざしのみなぎる大気のなかへ、小鳥たちの歌声にまじって、教会の鐘の音が鳴りはじめた。それは本打ちの鐘の三十分前に鳴らす「前打ち」の鐘だったが、わたしにとっては、天来の声であった。わたしはパチンコをほうり出すと、やにわに小鳥たちを追い立て、小鳥たちが飛びさってわたしの相棒のパチンコから安全になるのを見ますなり、家へ逃げかえった。

それ以来、「わたし」は、受難節の鐘が鳴りひびくたびに、この鐘があのととき、「なんじ殺すべ

からず」といいましめの声をわたしの心のなかに呼びさましたのだ、ということをお願いおこして感動し感謝する、といっています。そして重要なことは、そのあとに、こうつけ加えていることです。「わたしはこの日から、敢然として人を恐れる気持から解放された。自分の衷心からの確信がそこにある場合には、もはや以前ほど他人の意見を重んじなくなった。仲間の者から笑われることを、つとめて気にしないようになった。」

わたくしは、右の部分を抄出しながら、シュヴァイツァー博士が、後年アフリカのランパレネのほとりを流れるオゴウエ川の船の上から、中の島の砂洲をゆっくり歩いていく子どもづれの河馬の一群を見たとき、「生への畏敬」ということばがひらめいたという、博士の述懐を思いあわせていた。

(昭和四十年十二月)